

令和 5 年度

横浜市立高等学校  
及び  
併設型中学校

学校関係者評価書

対象校：横浜市立  
横浜サイエンスフロンティア高等学校

## 調査全体の日程

調査日：令和 6年 3月 8日

調査対象校：横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校・附属中学校

調査チーム：学校運営協議会

リーダー：浅島 誠（YSF 常任スーパーアドバイザー）

小原 孝之（小原木材株式会社 会長）

小島 謙一（YSF 特別科学技術顧問）

末広 峰政（理化学研究所 横浜事業所 所長）

橘 勝（横浜市立大学 教授）

横川 幾子（YSF 保護者と教職員の会 令和5年度副会長）

中島 康晴（YSF 保護者と教職員の会 令和5年度会計）

記録等担当者 藤本 貴也（YSFH 校長）

清田 英美（YSFJH 校長代理）

吉原 史朗（YSFH 副校長）

平野 謙（YSFH 副校長）

蛭田 智（YSFJH 副校長）

## 1 第4期横浜市教育振興基本計画の推進状況

### □総合的な探究の時間の取組

総合的な探究の時間を、附属中では「サイエンススタディーズ」高校では「サイエンスリテラシー」と位置づけ、探究活動を行っている。

附属中学校では1年生で外部講師による講演や演習、校外学習を通じて課題設定に向けて視野を広げ、その中からテーマを決め、ポスター発表を行っている。2年生では、1年生での学習を生かし個人による研究を年間を通じて行い、ポスターと論文を作成し、研究発表会を行っている。3年生ではチームによる共同研究を行っている。2年生までに学んできたことを持ち寄って、チームによる協働作業をすることによって、さらに探求を深めている。最終的には論文を作成し、研究発表会で研究の成果を披露している。

高校では1年次に「サイエンスリテラシーⅠ」として、サタデーサイエンス（土曜日に行われる特別講演会）により、幅広い分野の専門的な知識を獲得し、また、プロジェクトベースの実習を通じて、研究の基礎となる知識や技能を身につけている。2年次では、「サイエンスリテラシーⅡ」として6分野15コースに分かれ、個人で設定したテーマについて1年間研究している。秋に行われる校外研修では、英語で研究発表を行い、年度末には最終発表会を行っている。3年次では、「サイエンスリテラシーⅢ」としてさらに研究を深め、学会等で成果を発表している。

令和5年度に行った生徒アンケートにおいて「総合的な探究（学習）の時間」（サイエンスリテラシー及びサイエンススタディーズ）では、生徒が主体的に考え、行動し課題解決ができるようになった。（高校生徒 3）」という質問に対して肯定的な回答が90%となるなど、生徒の主体性を重視し、他の生徒との意見交換や中間発表での外部講師による評価を通じてより深い学びをすることができている。

中高6年間を通したサイエンスリテラシー・サイエンススタディーズのプログラムの充実についてはSSH将来構想委員会を通じて検討を行っているところであり、今後も引き続き系統立てた教育課程の策定を望む。

### □魅力ある学びの創出に向けた取組

学校計方針をよく理解し魅力ある高校教育の推進に向けて教育活動に取り組んでいる教職員が多く、教育理念に基づいて学校経営が進められていることが分かる。中高の連携を意識してさらに充実した教育活動を継続的に進めることが重要となっている。

魅力ある高校教育の実現に向けては、令和4年度よりSSH重点枠に指定され、マレーシアのプトラ大学との海外連携を柱とした取組が充実しているのが分かる。また新学習指導要領に基づいた新しい学習観による授業や評価について研究することができている。

また、附属中学校においても「サイエンススタディーズ」を中心とした課題解決型の授業を展開し、サンモールインターナショナルスクールとの交流やマレーシアのプトラ大学との共同研究活動、YSF-FIRST（本校で開催される課題研究発表会）での英語発表など国際的な意識を高める教育が行われている。

SSHの課題でもあるが、魅力ある高校教育の推進については、今後も「教育理念を理解して学校経営に臨むことのできる継続性と中高教職員間の連携」を強化することが望まれる。

### □グローバル教育・サイエンス教育の推進に向けた取組

グローバル教育については、SSH重点枠の2年目となり、年間を通してマレーシアプトラ大学との共同課題研修を行っていることは高く評価できる。また、それだけでなく姉妹校であるカナダ、デイビットトンブソン高校とのオンライン交流会や米国西海岸オンライン研修を行うなど海外の高校や機関との交流を継続して行っている。コロナ禍が収束したのちにオンラインではなく直接交流活動が行われることが望まれる。

サイエンス教育については理数探求及び総合的な探究の学習の時間をサイエンススタディーズ・サイエンス

リテラシーと位置づけ探究活動が附属中1年から6年間を通して行われている。学校評価の「サイエンスリテラシー、サイエンススタディーズをはじめとする取組によるサイエンス教育、オンラインを含む海外研修の実施によるグローバルリーダー教育が充実している。」という教職員アンケートにおいて、肯定的な回答が85%となっており充実した教育活動が行われている。また、サイエンス教育推進の拠点校として、他の市立高校の担当者を本校に集め、本校の取組を紹介するとともに、他校の実践の共有を図るなどサイエンス教育の拠点校としての役割を果たす必要があると考える。

## 2 教育活動の状況

### □教育課程の状況について

本校の教育課程の中心となっている「サイエンスリテラシーⅠ」「サイエンスリテラシーⅡ」については現状を維持するのではなく、さらなる高みを目指して改善していくことが望まれる。また、教職員の負担軽減の視点や教職員の異動等の視点も取り入れ、持続可能な「サイエンスリテラシーⅠ」「サイエンスリテラシーⅡ」になることも期待している。

附属中学校においても、「サイエンススタディーズ」での課題探求の授業や、生徒が主体的に学ぶ「DEEP学習」が各教科で行われており、高校への学びの継続がこれまで以上に期待される。

新学習指導要領における評価・評定の項目に関しては、すでに新学習指導要領を実施している附属中学校と緊密な連携をとり、研修を継続して行い評価・評定の理解を深めている。

SSHとしての在り方にも関係するが、教職員の在勤年限や中高の教職員の人事の一貫性が問題となっており、本校の教育理念に基づく教育課程の継続に関わる課題となっている。よって中高一貫教育校として、在勤年限、中高の教職員の融合を組織的に考えた人事をお願いしたい。

### □生徒指導・教育相談の状況について

年間を通して予防的な生徒指導や計画的な教育相談を実施するなど、対話を通じた丁寧な生徒への支援を行っている。担任だけでなく、年次担当の職員も加わり幅広く相談できる体制を整え、生徒指導・教育相談の状況については丁寧に生徒の状況を把握している。支援が必要な生徒については保護者等と連携し、場合によっては関係機関との連携も視野に入れ、それぞれの個性に合わせた対応を行い本人の特性に応じ、よい部分を伸ばし、苦手な部分を支援していくようにする。

今後も、職員と生徒との対話する時間を大切にし、また、特別に支援が必要な生徒を中心に、さらなる支援を行っていくとともに、教職員も支援の方法に関する研修をすすめてもらいたい。

## 3 学校経営の状況

### □組織運営及び教職員の研修の状況について

中高一貫教育を推進するため、中高の教職員が教育課程・教育内容・学校行事・生徒指導・進路指導等について企画・立案・実施・検証・改善を重ねるための様々な諸会議で報告し、全体で共有することで中高の教職員の協働を図っている。また、中高合同で職員研修会を開催し、本校の教育理念や教育目標に共有するとともに、発達障害、生徒指導、教科指導等についての研修を行っている。

また組織運営に関しては、適材適所の人事配置を行い、スムーズな学校運営を図っている。これからも常に状況を把握しながら組織運営及び教職員研修を行い、ぜひ、中高一貫教育の特性を生かした教育を進めてもらいたい。

今後は、業務軽減のためにも部活動指導員、卒業生や保護者等の力を借り、充実した教育活動も進めてもらいたい。

## □学校に関する情報公開の状況について

学校案内パンフレットや高校では年2回「Science Frontier News」、附属中学校では年1回の「YSFJH News」の発行を行い、また、ホームページの「Diary」では、本校の理念や求めている生徒像を明確にし、受検を考えている生徒や保護者等に有効な情報を提供することができている。学校ウェブサイトに掲載する情報については、昨年度よりも有効かつタイムリーな情報提供を行うことができていた。

学校に関する情報公開については、今後も外部への情報は、活発に提供してもらいたい。大変な作業ではあるが、魅力あるホームページや学校案内にすることで、更なる情報公開の充実に向けていただきたい。

## 4 いじめへの対応に関する項目

### □いじめへの対応について

教育相談を担当だけでなく年次・学年の多くの教員が行うことで、教員と生徒の信頼関係を深めることができている。また、生徒に関わっている教員が綿密に情報交換を行うことで、生徒の些細な変化に気づき対応することができていた。

授業においても、話し合い活動を行い、生徒同士が自分の意見を発信し、他の意見を受信することがスムーズに行われるようになってきた。他者理解はもちろん、それに伴う自己理解が行われているように感じる。本校に入学する生徒は、それぞれの地域の学校で学習等ができる生徒だったのが、入学後に思うように学習の成果がでず、自己肯定感が低下する傾向にある。他者と比べるのではなく自己の成長にフォーカスし自分自身をありのままに認められるように支援していただきたい。また、様々な個性あふれる生徒が多いため他者理解の重要性も身につけてほしい。いじめへの対応は、初期対応が大切だと考える。早期発見と丁寧な指導の継続をお願いしたい。

## 5 学校関係者評価 提言（380字以内）

SSHの指定校としての中高一貫教育校の特徴が生かされる学校運営を期待している。本校は高校から入学してくる生徒もいるので、その生徒たちのことも含めて、どのように中学生と高校生が「融合」していくのかを見据えたカリキュラムマネジメントが必要だと考える。附属中から進学してきた生徒と高校から入学してきた生徒をどのような観点から評価し、どのような力を身につけさせたいのかを考えたカリキュラムの設定が求められる。総括の評価は厳しくつけられており、これは問題を的確にとらえ改善する意識が高いものと考えられる。今後も学校の理念に基づいた教育をすることで、さらなる学校の発展に尽力してほしい。